

川谷充郎

KAWATANI Mitsuo

フェロー会員 工博

関西支部幹事長・元FCCW代表幹事

神戸大学教授 工学部建設学科

関西という土地柄は、既成概念にとらわれず進取の気性を持つといわれる。FCCが全国に先駆けて関西支部に発足したのもむべなるかなといえる。ただ、FCCは一朝一夕に構想されたものではない。関西支部では約20年前にすでに、土木の本質が一般社会に理解されるにはどのような活動が求められるかが検討され、1987（昭和62）年、支部創立60周年記念事業の一環として小学生向け副読本「自然と叡智」を出版し、関西一円の学校・図書館などに寄贈された。さらに、より強力な出版事業として、1989（平成元）年、講談社ブルーバックス「水のなんでも小事典」を支部編集として刊行し、これはその後も、橋・地盤・川をテーマに続刊されている。これらと並行して、市民対象行事を企画運営したのも、土木学会が「土木の日」を制定して一般社会向け広報活動・見学会などを事業化する以前のことであった。当時、バブルに浮かれるような社会状況にあって、土木技術者自らの足元を固め、21世紀を見通す活動の必要性が痛感された。それは哲学・理念に基づかなければならず、そこにオピニオンリーダー河田恵昭氏（当時、京大防災研究所助教授、現、同教授・巨大災害研究センター長）を得たのであった。

FCCの行く先を考える本稿において発足当時を振り返ったのは、初心に帰ることを求めるためではない。激動の時代といわれて久しい。今はさらに時代の動きが激しく、土木界を取り巻く情勢はFCC発足当時に比べるべくもなく厳しい。それは、本特集の第1章でも語られたところである。移り変わる世の中の要求を無視して土木事業が成り立つものではないが、一方、われわれの担う社会基盤整備・維持管理は子々孫々に受け継がれるものである。高々数年の舵取りを担う政権の人気取り政策に左右されることなく、「国家百年の大計」に携わるテクノクラートとしての責務は大きい。テクノクラートであるが故に、技術者としての技量のみならず、

国としてのあり方を思量できる哲学・理念を身につけていなければならない。これは官僚だけではなく土木に関わるすべての技術者が意識しなければならないことであろう。さらに、成熟社会における個の自立が土木家には求められる。ここにFCCとしての意味と方向性があると考えている。以上につき、大学人の青臭い書生論に過ぎないと感じられる方が多いことであろう。土木事業の厳しい現実のなかで日々苦闘されているFCCメンバーの呻きを見聞きするにつけ、それでもFCCの理念を追求する自立したテクノクラートとして、理想を実現できる未来のあることを願っている。

関西支部幹事長は学会理事を兼任しており、これは他支部にはないことである。支部活動に直接携わる理事として、年間8回の理事会に出ていて感じるのは、約4万名の大半の会員にとってのメリットは日常的な支部活動に依存していることである。関西支部は支部会員も多く、恵まれた環境にあってFCCなる活動を行っているが、各支部におかれてもそれぞれの地域性を活かして、自立したテクノクラートを育て・支援する活動を展開されることを願って本稿をおく。

